自己制御学習に関する研究（3）

－未知な語の学習における例文の提示方法について－

○岡　直樹　　桐木建始
（福岡教育大学）　（広島女学院大学）

key words:未知な語の学習，既有知識，プライミング効果

未知な語の学習においては，それを既有知識へ組み込むという観点からは，関連する語とあわせて提示する，つまり文脈のある形で学習材料を提示する方法が有効であると考えられる．そこで本研究では，未知な語と文脈となる例文をあわせて提示する．そして同じ例文を反復提示する条件と，異なる例文を提示する条件を設け，例文の提示方法について検討することを目的とする．学習材料としての未知な語には，「沖縄の方言」であるウチナーグチを用いることとした．

新たに学習されたウチナーグチが既有知識に組み込まれると，ウチナーグチと既有知識のリンクが形成されることになる．リンクが形成されれば，ウチナーグチをプライムとして提示すると，それと意味的に関連する既有知識へ活性化が拡散することになる．したがって，ウチナーグチのプライムと意味的に関連する既有知識の語（共通語）がターゲットとして提示されると，プライミング効果が生起すると考えられる．そこで本研究では，プライミング効果を指標に未知な語の学習について分析する．

方　法

被験者　大学生28名（男子11名，女子17名）．

実験計画　2×3の要因計画を用いた．第1の要因は例文の提示方法についてであり，1文条件と3文条件を設けた．第2の要因はプライムとターゲットの関連性についてであり，プライム（ウチナーグチ）に対応する共通語がターゲットとして提示されるMR条件，プライムと意味的に関連する共通語がターゲットとして提示されるSR条件，プライムと無関連な共通語がターゲットとして提示されるUR条件の3条件を設けた．いずれも被験者内変数であった．

材料　ウチナーグチは，カタカナで表記した2～5文字の語，48語．例文には，ウチナーグチを含む2～5文節の文を用いた．各ウチナーグチについて，例文を3文作成した．ウチナーグチ48語は，12語ずつ4ブロックに配分し，各ブロックについて12語のうち6語を1文条件，残る6語を3文条件とした．1文条件と3文条件の振り分けは被験者間でカウンターバランスした．語彙判断課題のターゲット（カタカナ，ひらがな，漢字で表記した2～5文字の共通語）として，ウチナーグチ1語についてMR，SR，UR条件用の共通語を1語ずつ，またNO条件用の無意味語2語を用意した．再認テストには，ウチナーグチとそれに対応する共通語のセット（MR条件）48対と，SR条件48対，UR条件48対を用いた．
また語彙判断と再認テストで使われるSR条件とUR条件への共通語の振り分けは被験者間でカウンターバランスした．

手続き　実験は個別的に行った．ウチナーグチ12語の学習セッションと，その12語に関する語彙判断セッションを1ブロックとし，合計4ブロック行った．学習セッションではウチナーグチと，それに対応する共通語，ウチナーグチを使った例文を同時に10秒間提示した．そしてウチナーグチ12語を1リストとして，3回繰り返し提示した．リスト内での提示順序はランダムにした．学習セッションの後に3桁の数の逆算課題を30秒間行い，その後語彙判断課題を課した．第1ブロックのみ語彙判断の練習試行を30試行行った．各試行では，まず凝視点（＋）を1000 ms提示し，100 msのブランクをおいてプライムを100 ms提示，100 msのブランクをおいてターゲットを提示した．プライムに対する課題は黙読，ターゲットに対する課題は語彙判断とした．

4ブロック終了後，全ブロックを対象に再認テストを行った．練習試行を6試行行った後，実験試行を144試行行った．まず凝視点を1000 ms提示し，その後ウチナーグチと共通語の刺激語対を同時に提示した．再認判断は，共通語がウチナーグチの意味として正しければ右，正しくなければ左のスイッチを押すことにより報告するよう求めた．

結　果　および　考　察

語彙判断について　語彙判断のRTをFig. 1に示した．分散分析の結果，例文の提示方法×プライムとターゲットの関連性の交互作用が有意であった（$F(2,54)=3.18$, $p<.05$）．下位検定の結果，1文条件では，SR条件のRTがUR条件のRTより有意に短く，つまりプライミング効果が認められたが，3文条件ではプライミング効果が認められなかった．1文条件では，ウチナーグチから意味的に関連する共通語へ活性化が拡散するような形で，ウチナーグチが既有知識へ組み込まれたといえよう．

再認テストについて　NO判断であるSR条件とUR条件のRTをFig. 2に示した．分散分析の結果，プライムとターゲットの関連性の主効果が有意であった（$F(1,27)=18.24$, $p<.001$）．これはSR条件では，ウチナーグチと意味的に関連する語が活性化していることによる抑制効果が生起したものと考えられる．3文条件でも抑制効果が見られることから，3文条件においても，再認時に抑制効果を引き起こすレベルまではウチナーグチが学習されていると考えられる．

以上のように，本実験結果からは3文条件よりも1文条件のほうが，ウチナーグチをよりうまく既有知識に取り込む学習がなされたといえる．学習の初期段階では，同じ文脈で繰り返し学習することが効果的であるといえよう．

(OKA Naoki, KIRIKI Kenshi)

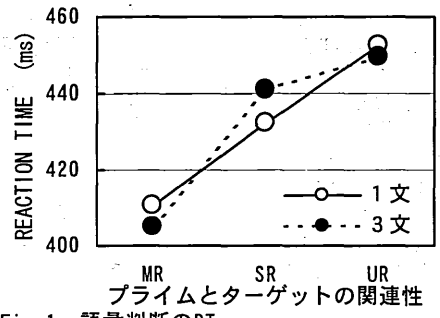

Fig. 1　語彙判断のRT

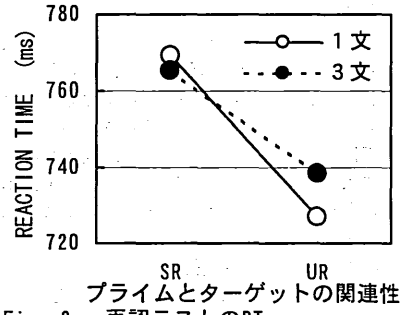

Fig. 2　再認テストのRT